

## 落合淳思著『甲骨文字の読み方』（講談社、二〇〇七年）

本書は第一章「甲骨文字とはなにか」第二章「入門編 文字を読む」第三章「中級編 難しい文字を読む」第四章「文法編 甲骨文字の文章のしくみ」第五章「應用編 文章の解讀」の五章で構成されている。

第一章では基礎知識として甲骨文字がいかなるものであるのか説明している。まず、どういった時代に作られたのかを述べている。殷の風習や文化は本題ではないので深く觸れていない。次に「甲骨文字解讀小史」としてこれまでの研究の振り返りと何故甲骨文字が讀めるのかを述べている。ここで甲骨文字が金文、篆書などから楷書に通じることを述べ、例として「馬」字を示し、文法が漢文と大差ないと述べている。第三節は甲骨文字の内容として占いが行われていた事を述べ、その種類をいくつか示している。第四節では甲骨文字がこの占いの記録のために用いられたが、天候を精密に豫測することの困難さから王の權威付けのためにその内容は改竄されたものではないかと述べている。第五節では甲骨文の資料としての價值について、甲骨文字の殷の系譜と『史記』殷本紀の系譜を照らし合わせてその重要性を述べている。第六節では漢字の成り立ちとして甲骨文字は「現存最古」であって「最古」ではないとして、二里頭遺跡の規模から文字が必要だったと考察し、残っている甲骨文字はこれより數百年経ているためいくらか字形が變化しているだろうと述べている。さらに、文字の前身として姜寨遺跡の陶文を例示している。

第二章からは本題である甲骨文字の読み方の講義である。本書では

解讀方法や分類の解說の後、それを用いる練習問題を置く構成をとっている。第二章では入門として「象形」「指事」「會意」「形聲」の四つに分類して解說しているが、これらの分類は曖昧であり、筆者の述べるように厳密に分けるには限界がある。

第三章では中級編とし初文と繁文について講義している。この變化は「意符・聲符」「字形の置換」「假借」に分類している。さらにここで現在に伝わっていない文字について述べている。

第四章文法編は二節に別れており、第一節では実際に甲骨文を讀むために品詞の種類や語順など文章そのものの読み方の他に、実際に甲骨に記された文章の読み方についても述べている。第二節では甲骨文の文章構造とその区切りについて述べている。

第五章はこれまでのことを用いて実際に拓本から甲骨文を讀んでいく。これまでのものを承ければ難しくはないだろう。

非常に丁寧な解說といくつもの設問によって、初めて甲骨文字を讀もうとしている人の入門書としては充分なものである。

巻末には資料として本書で紹介された甲骨文字の辭書と用語の解說が掲載されているが、掲載されているのは本書で使用された甲骨だけなので、実際に研究するには數が少なすぎるため、専用の本が必要だろう。

（丸山啓樹）